奥琵琶湖

歴史の里 菅浦

菅浦

菅浦は、中世において畿内の先進地域であった琵琶湖北端部つづら尾崎先端に位置し、背後を標高約400メートルの山々に囲繞(いじょう)された狭隘(きょうあい)な扇状地に展開する集落です。

中世の惣村として、あるいは琵琶湖水上権を掌握した禁裏供御人の居住地として有名で、歴史学をはじめ各方面からの研究がなされています。

四足門

菅浦には、東西の両端に「四足門」と呼ばれる門があります。この門は石組の上に2本の本柱と2本の控柱を立て、本柱に冠木を置き、控貫と足元貫でつなぎ、肘木で桁を支える構造で冠木門の一種です。

屋根は茅葺の切妻で、破風飾りは民家と同じ菅浦独特のものです。扉は無く、控柱の方向で集落の内外を示しています。「木戸門」に類似していますが、閉鎖性はなく、領域性は象徴的なものといえます。この門は「四方門」とも呼ばれ、近年まで東・西・南・北の集落入口に設置され、集落内を明確にしていました。

現存する東門の棟札からは、幕末期の文政11年(1828年)8月吉日に再建されたことがわかります。

また、菅浦に残された文書からも、中世後期にはこの門が既に存在していたことが確認されています。